

日本社会福祉学会第 62 回大会秋季大会の開催にあたって

日本社会福祉学会第 62 回秋季大会
大会長 田中 英樹（早稲田大学）



学会員の皆様、関係者の皆様

来る 11 月 29 日（土）、30 日（日）に早稲田大学本部校早稲田キャンパスで開催されます。日本社会福祉学会第 62 回秋季大会もいよいよ目前となってきました。今回の大会は晩秋の季節に首都東京で行われることもあり、全国から多くの方がご参加されるかと思えます。すでに口頭発表、ポスター発表、特定課題セッションでの発表などに 400 題近いエントリーがあり、今その会場確保に追われています。先にご案内しましたように、本研究大会のテーマは、“社会福祉は日本の未来をどう描くのか”と設定させて頂きました。その背景には、今日の日本社会で、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災と福島原発事故以降、不安や危機や社会的格差が増大し、未来社会に対する不透明感が広がっていることがあります。そのため、未来を主体的に見通すには、新たな価値観や社会システムのあり方を創出することが不可欠でしょう。実践科学、設計科学としての社会福祉学が人々の様々な生活困難の一つひとつ立ち向かい、生活課題とどう切り結んでいくのか、隣接する公共政策領域やヒューマンサービス分野の役割と交流するなかで深めていきたいと考えました。幸い、各地で地域社会の衰退に抗した「地域社会再生の軸としての社会福祉」への期待も高まっています。

大会のメイン・シンポジウムでも、「人々の生活に密着する社会福祉（実践やサービス）が日本の社会で何を担っているのか、10 年、20 年後の未来社会から何を期待されているのか？」に迫るために、近接する領域でも、これまであまり論じてこなかった、建築やまちづくり、環境や労働、学校や司法、産業や商業などの関係と社会福祉をクロスオーバーさせた議論を考えています。たしかに、多くの課題は人々の暮らしや社会の発展を支える領域の壁を超えた協働の実践であるでしょうし、現象的には求められる社会福祉への周囲からの期待が高まり、社会福祉のウイングが広がっているようにも見えます。しかし、過疎化であれ、人口流出であれ、少子高齢化社会や人口減少社会などや社会の様々な分野で生じている歪みや課題などに社会福祉だけで対応することの限界も指摘されます。逆に社会福祉実践にこれからもっと期待されてくる役割は何かも明確にしていく必要があるでしょう。また、環境や建築やまちづくり、司法、学校、労働、産業、商業、情報、文化などと社会福祉がどのようにつながっていくことが求められているのか？さらには、社会福祉は各領域・分野にとって、対等性を保持できるのか、もしくは各領域、分野に「利用される」従属的な関係なのか？なども含めてフロアーの皆様を交えて深めていく機会できればと思います。

いずれにせよ、人々の暮らしの再建と幸せの増進のための社会福祉学と社会福祉実践の未来図は、エビデンスベースド実践 (Evidence-Based Practice) とバリューベースド実践 (Value-Based Practice) を統合した、知と希望を創造することにあると考えます。

今回の大会は、こうした社会福祉の可能性を未来からダウンロードして探っていく機会にしたいと思えます。アクセスの良い、本部校（早稲田）キャンパスでの開催です。大会校としては、土曜日に行わ

れます情報交換会などを除いて十分な「おもてなし」は出来ないかもしれませんが、いましっかりと準備を進めている最中です。皆様のご参加を心からお待ちしています。